



エルフと
隠れ里



魔法使いと
妖魔達の悪意



踊り子は
泣く



魔法戦士と
失われし宝玉



戦士と
薬師脅迫

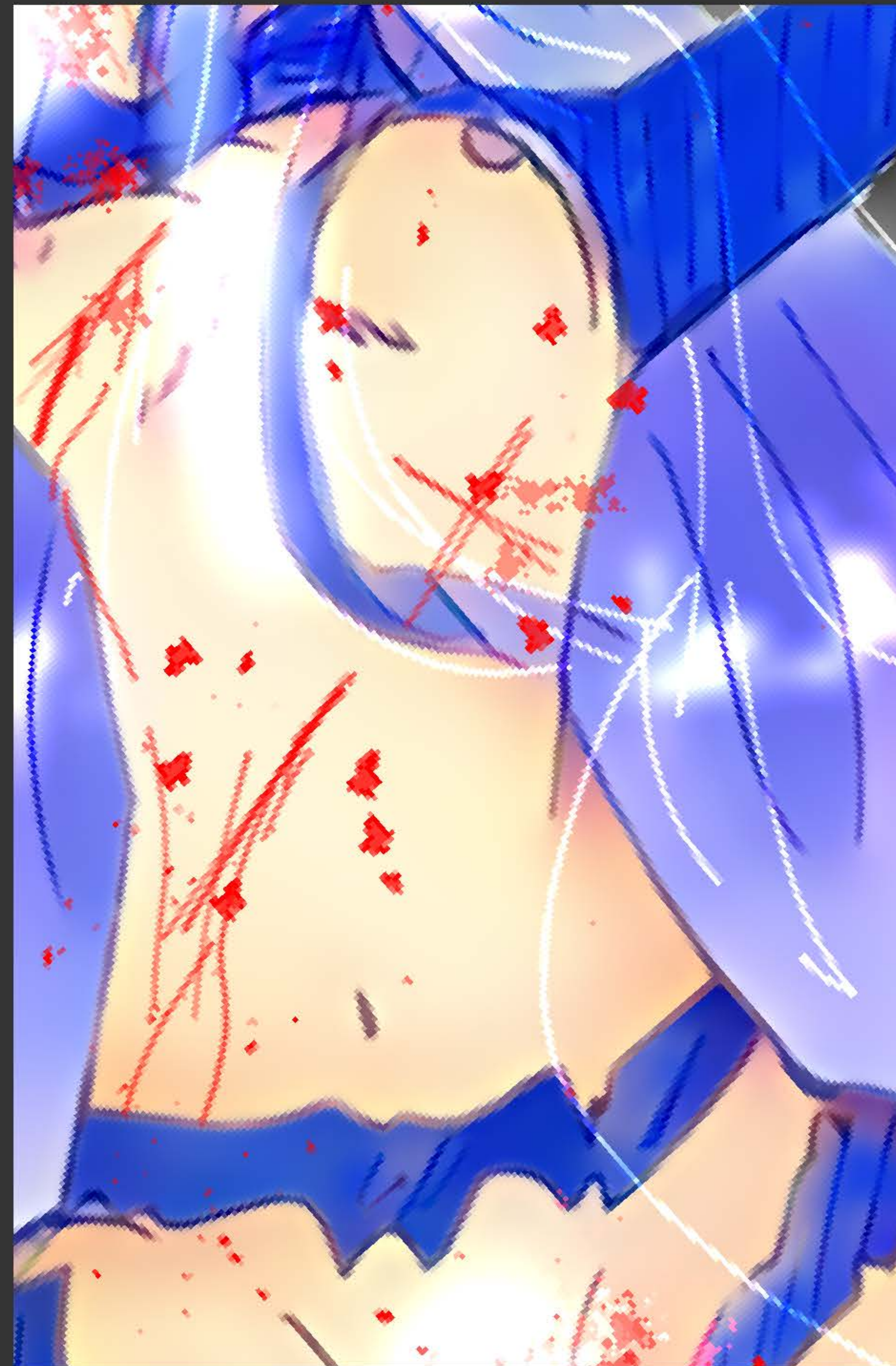


これは体験版です

「戦士と薬師脅迫」を
閲覧できます

ヒロインピンチ短編集

ざこきやら堂



戦士と
薬師脅迫



「わあ、この薬師さんが、治してくれるの」

少女は笑っていた

国一番の薬師

自信があった

回復魔法でさえ、困難な病気も、薬師の
手にかかれば、なおせるという噂

……………噂だけだ

少女は救えなかった

自堕落になったきっかけは、
それだけじゃないかもしれない

街の中心から、森の奥に住処をかえた



まだ薬師を続けている

他にすることがない

「あの、薬師殿、いますか」

「頼んでいた、お薬をもらいに来ました」

人気のない場所

それが狙われた原因だった

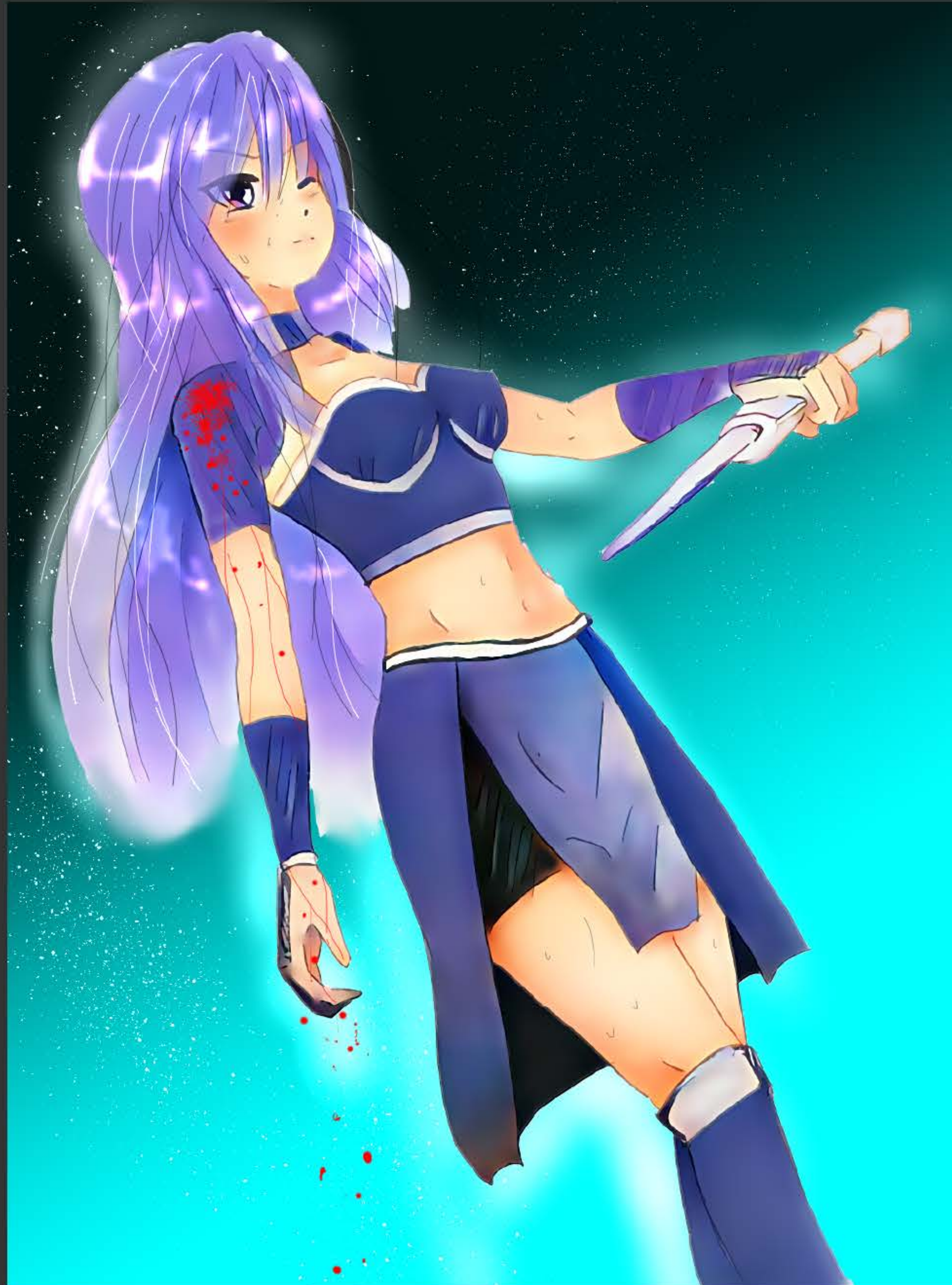
「！？ 薬師殿！ 危ない！ ぐっ！！」

女戦士が自分の肩から、ナイフを抜く

「盗賊か！」

暗がりから1人、2人、3人……
完全に囲まれた

「なぜ…薬師殿の…家の中から…」



「相手は、怪我人だ！」

「楽勝だろう」

だが、なかなか女戦士を倒せない

「どういうことだ」

「ふん、このくらいハンデにもならんな。おまえのボスはどうした。出てこないのか」

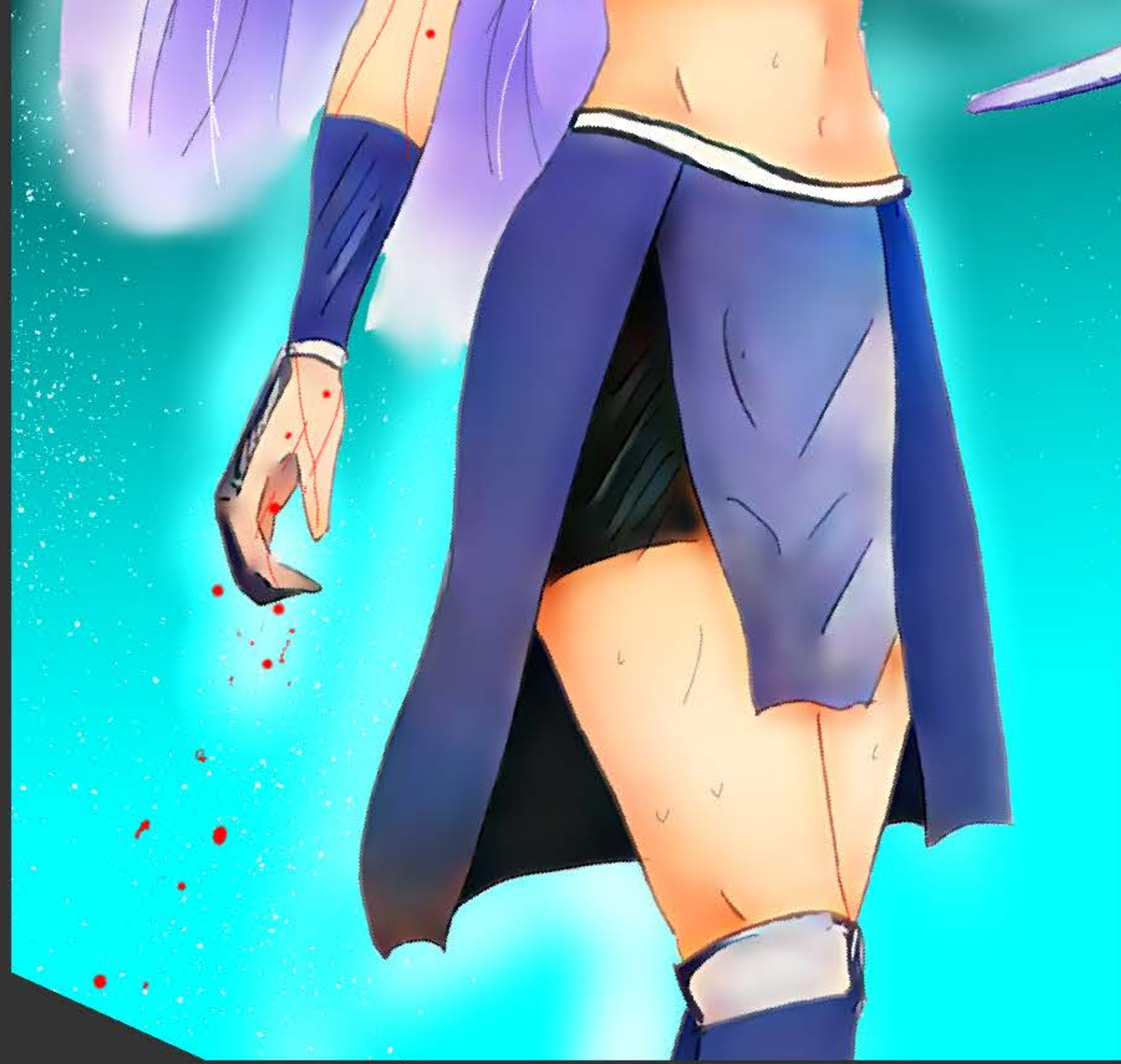
盗賊は思いつく

矢を薬師に向ける

「! ?」

女戦士は、矢をはじいた

同時に身体を斬られる



薬師を背中にかばい、女戦士は叫ぶ
「安全な場所に逃げなさい……」

薬師は静かに、
女戦士の首に毒針をさす

「…………え…」

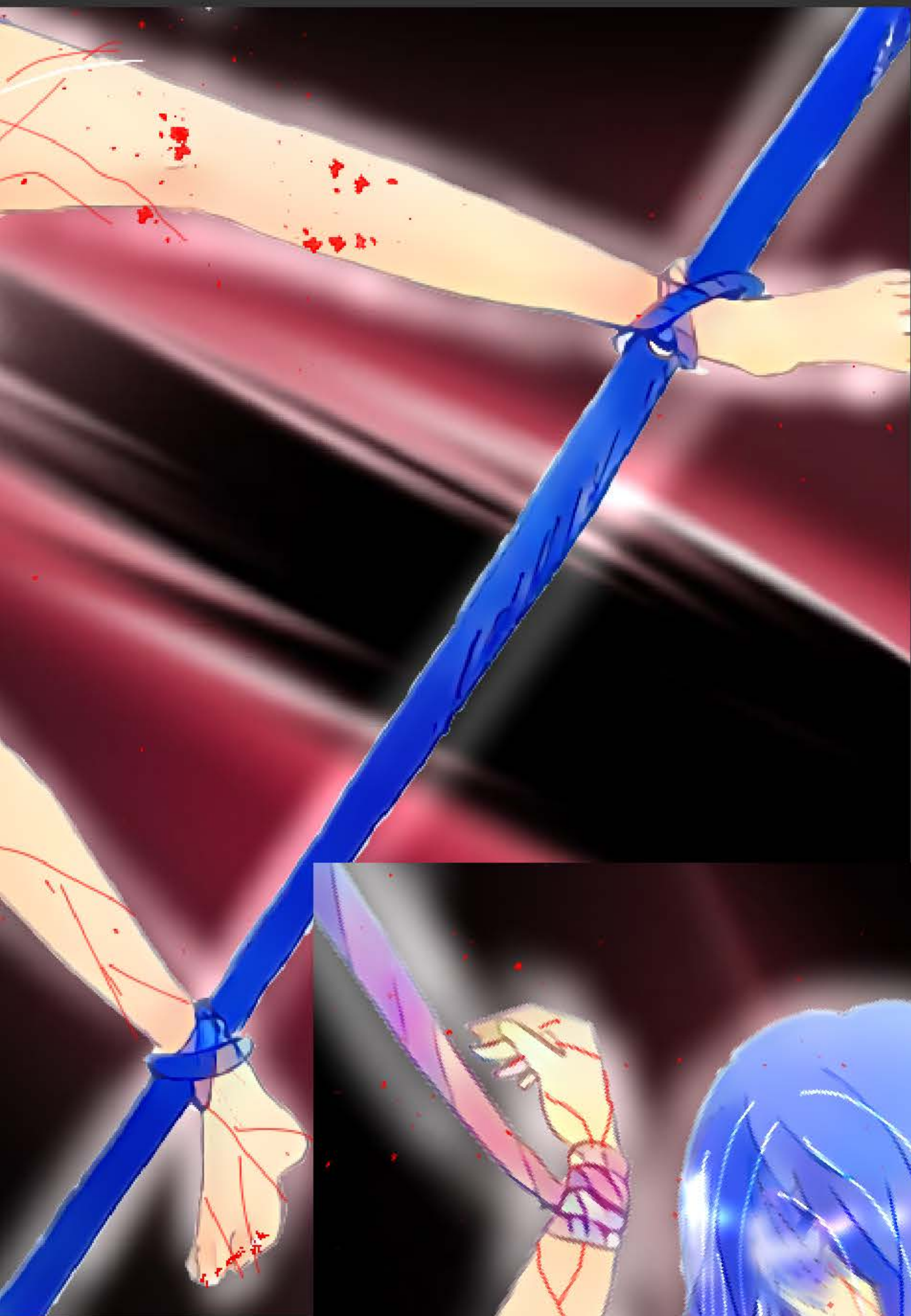
その場に、女戦士はその場に崩れ落ちた

「ありがとうよ、有名な薬師さんよお」

「はじめてにしては、よくできましたねえ」

そう、仕事だ
脅されて無理やりやった
嫌な仕事だ





薬師は、数日は、身体が痺れて動かないだろうと、盗賊たちに告げる

一応、軽く、拘束した

「あ…う…」

「どのくらい痺れているか、試してみるか」

盗賊が、女戦士の傷口を踵で弄ぶ

「う……あああああ！！！」

「いい悲鳴を出すじゃねえか」

「反応があるとは、嬉しいねえ」

盗賊たちの瞳が、悦びで満ちていた





女戦士に、盗賊たちは、どれだけ邪魔
をされたか

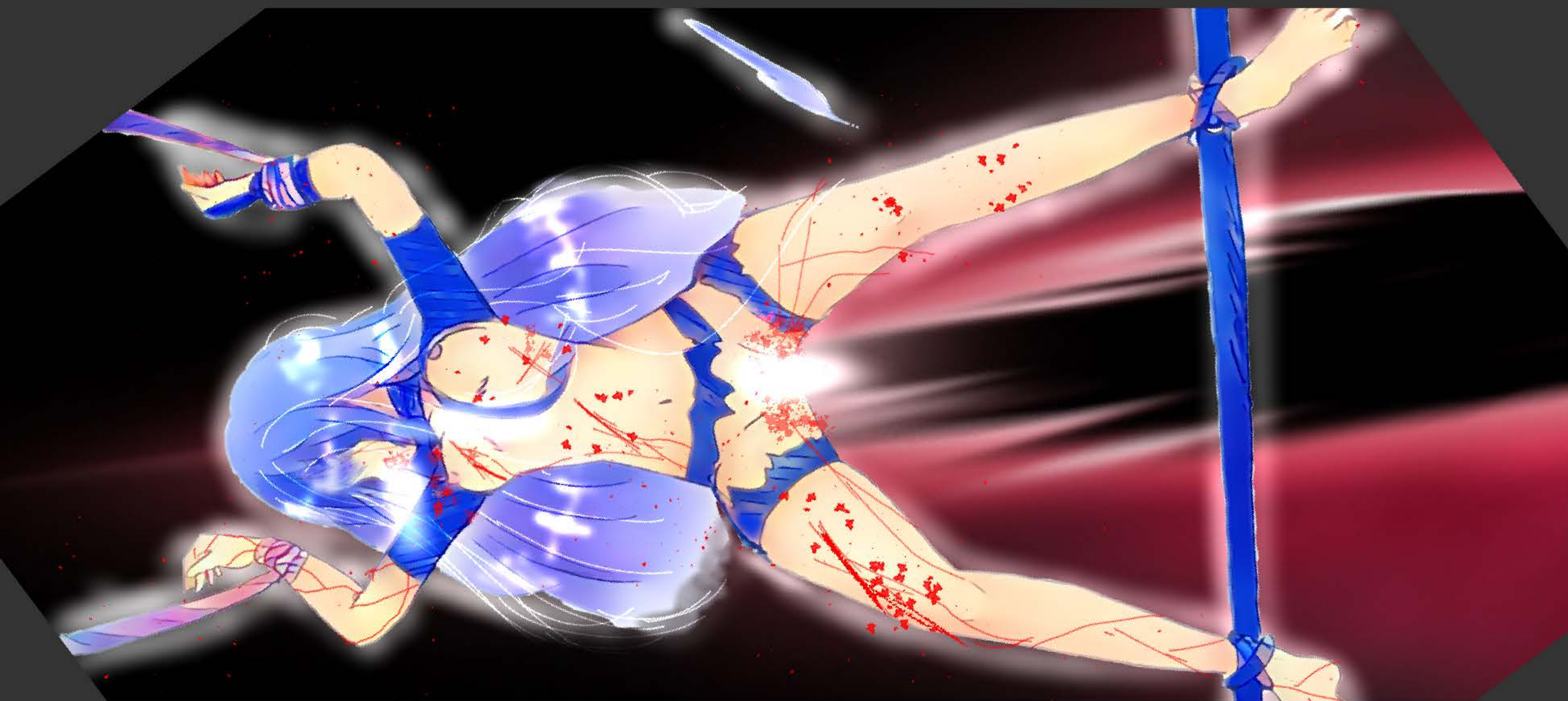
「俺たちを苦しめた身体だ」

「思ったより、筋肉がないじゃねえか」

「まだ、飾りが足らなくねえか」

女戦士は、長い時間、切り刻まれ、犯
された

薬師は、女戦士をみる
なぜ、命令を聞いたのだろう
なぜ、こんなことになったのだろう
命令なんてきかなければよかった
だが、もう遅い
最後まで、ただ見守ることしかできな
い



「おい、やりすぎるなよ、売り物にするんだからな」

「回復魔法って便利なものがあるんだよ」

「こいつには、痛い目に会わされてきたんだよ」

「女のくせに、でしゃばりやがって」

やがて、女戦士はピクリとも動かなくなった

「ほらな、やりすぎただろ」

「ボスが来たようだ」

「縛りなおしておけ」

「さて、薬師の先生」

「これは、お礼だ」

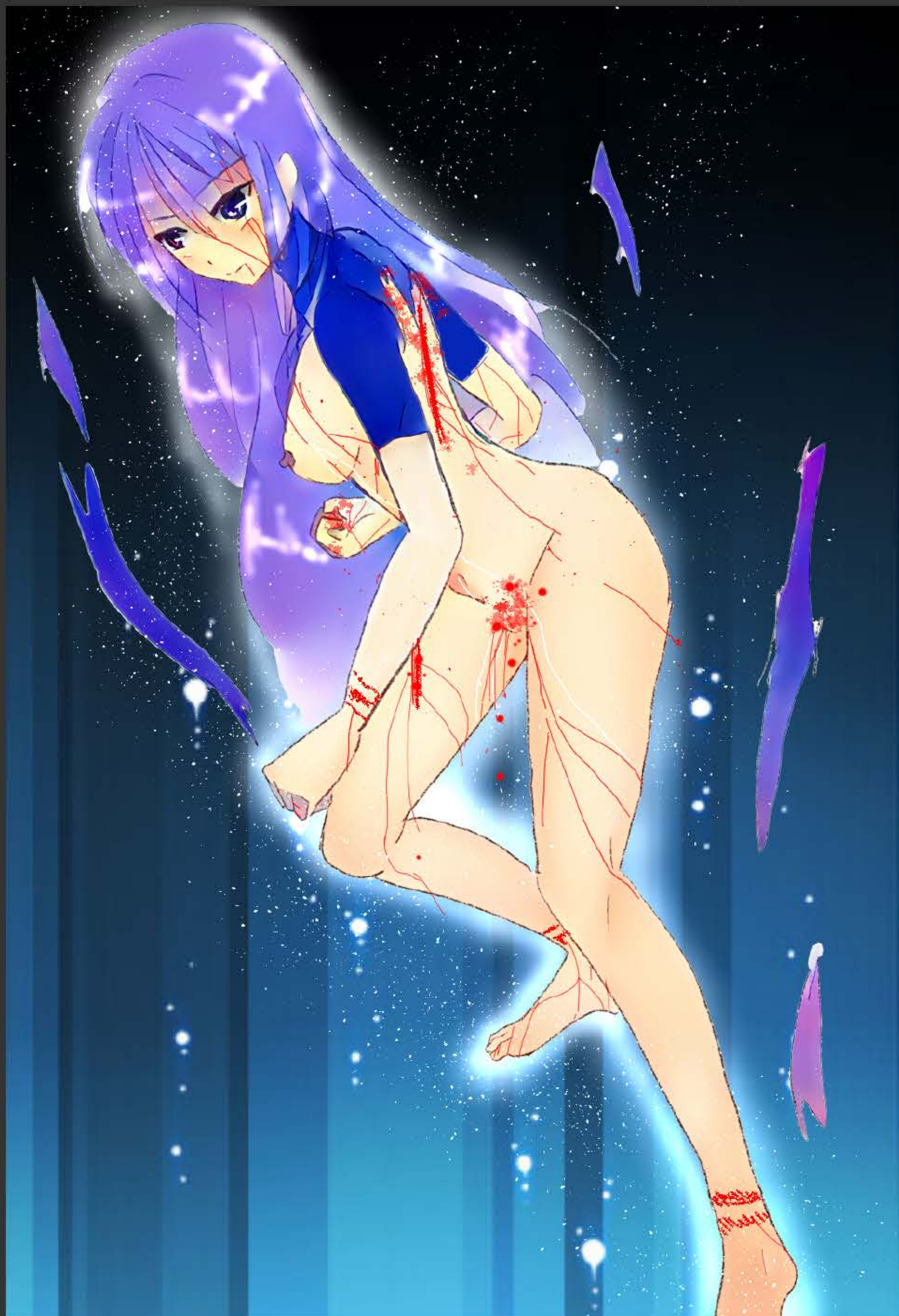
嫌な命令もここで終わりが

「楽に殺してやるよ、最高の礼だろ」

盗賊たちは、大笑いをする

ああ、やっと終わる

血飛沫があがる



女戦士が、薬師に抱きついていた
背中が斬られている

「……くっ！」

なぜ

命令は、「痺れ薬の量を少なく投入すること」だった

服を剥がされている間には、痺れはとれていたはずだった

「あなた達の…言う通りです…」

「回復できる便利な魔法があるのですよ……多少の傷ならね…」

淡い光が、女戦士を包む

「あなたが、この方々の頭ですか。はじめまして」



.....
「おかげで、一網打尽…とまでは、いきませんが、
組織の一角を崩したとしましょう」

「あなたには、嘘をつきました」

「妹の死は、あなたには関係ない」

「どんな薬でも、回復魔法でも、どうしようもない
時がある」

「それでも、自暴自棄になり、あなたを恨み」

「あなたを脅してから……」

「あなたも、深く傷ついていることが、わかった。
妹を全力で救おうとしてくれた、立派な方だった。
なのに……」

END